

## 1-3 実践の損益が示すアノマリー売買の有効性

### ■ ■ ■ 株主優待のアノマリーで実際に利益はあがるのか？

「株＜優待＞アノマリー情報」では、各銘柄について、「『上がりやすい月』がスタートする月初にロングして、権利確定月の月初に手仕舞う」。貸借銘柄については、加えて「『下がりやすい月』スタートの月初にショートして、『下がりやすい月』終了の翌月初に買い戻す」というシミュレーション売買の累積パフォーマンスを掲載している。いずれも右肩上がりのパフォーマンスを描く、という結果になっているわけだが、実際のトレードでそんな“いいとこ取り”的に儲かるのか。所詮は机上のデータ検証ではないのか、と考える人もいることだろう。

まさにその通り。たとえば、こうしたシミュレーション通りにポジションが取れるのか、手仕舞えるのかが、まず定かではない。また、仮にその通りに売買ができたとしても、シミュレーションと同等のパフォーマンスがあがるという確証はもちろんない。さらに、実際の売買では、それ相応のコストもかかる。よって、弊社サイトなどに掲載している他の検証結果も含めて、「この通りに売買すれば、このくらい儲かる」というようなことではない。

ただ、その銘柄の値動きは、少なくとも過去において、こういう傾向が顕著であった、というのは紛れもない事実である。その事実を踏まえたうえで、では現実にどういう売買をするか。データ検証通りにはいかない売買の約定価格を、どうやって有利な方向にもっていくか。実際にポジションを取った後に過去にはなかったような市場の大変動が起きた場合には、どう対応するか等々、実際の売買では諸々の問題に直面する。

果たして、データに表れているアノマリーに則した、言わば単純な売買で、本当にパフォーマンスがあがるものなのか。

これを小サイズのポジションで実験的に行った結果が図 1-3-1 である。



対象は、2013年3月から2015年3月末までに手仕舞った111売買(権利確定月=13年4月～15年4月)で、損益の単純累計は1552%、1売買あたりプラス14%となっている。売買コストは十分にペイできる損益率である。

この数字が出た背景としては、もちろん期間を通じて市場全体が良好だったことが大きい。日経平均株価の推移と併せて見るとわかる通り、日経平均株価が急伸している局面では損益も大きく伸びている。

日経平均株価が冴えない局面でも、そこそこ利益は確保されているが、次章で紹介するように、“ラッキー”によってパフォーマンスが出たトレードもある。また、市場全体が本格的に崩落すれば、どんな結果になるかはわからない。

よって、いつでも儲かる、右肩上がり利益が伸び続ける、という売買では決してない。実際に、「これはどう考えても失敗だった」という要反省の売買もある。ただ、市場全体が強いときには、相応の成果が期待できる売買であることは確かだと考えている。